

特別寄稿

新島襄の恩師たち(留学編) —新島伝の謎「授洗者は誰か」を解く—

もと い やす ひろ
本井 康博 (元大学神学部教授)

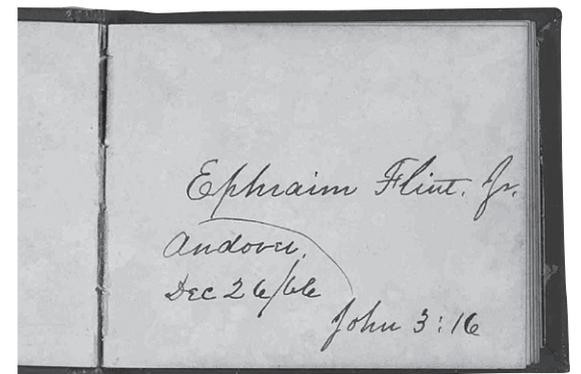
高校時代

新島襄は在米8年間の留学中、3つの学校に通った。その間、勉学と求道の両面で、何人もの「恩師」に恵まれた。ただ、洗礼を受けた牧師(授洗者)だけは、いまだに闇の中である。

アンドーヴァアのフィリップス・アカデミー(1865年〜67年在籍)での恩師と言えば、校長のS・H・テイラーであろう。新島のいわば「養父」(A・ハーデイ)が学園理事長であったうえに、校長はE・A・パーク教授(後述)とも昵懇の仲であったので、新島に対して気配りを忘れない。

教員以外では、新島と同じヒデユン家に下宿していたE・フリント・ジュニア夫妻の影響が、圧倒的である。フリントは現役の神学生(院生)だけに、妻と共に新島に聖書を講じた。新島が受けた聖書に関する初めての本格的な手ほどきであった。

高校時代の新島のサイン帳に、フリントは愛唱聖句「ヨハネ3・16」(「神はそのひとり子を賜ったほどに……」)を付す。



E. Flint Jr.の署名(高校時代の新島襄のサイン帳。新島遺品庫蔵)。

新島に最初に教えた聖句でもある。新島はこれをカードに日本語で記して、日曜学校教師にも贈る。また、この句を「聖書の中の太陽」「福音の要」と絶賛して終生、もつとも愛好した。これもフリント直伝であったことが判明する。ちなみに、フリントと新島の死後、フリント夫人が同志社に贈った献金で「フリント紀

念文庫」が同志社図書館に備えられた。

このほか、新島はヒデユン家を通うオールド・サウス教会の日曜学校で、P・F・マッキーン(女学校副校長)とも知り合った。が、詳細は不明である。

むしろ、教会役員(Deacon)のE・テイラーとの交流が、密であった。彼は日曜学校校長を長年務めたうえ、1868年からはフィリップスとアンドーヴァー神学校(両校は同じキャンパス)双方の会計となった。独身の彼は、週に一度はヒドユン家から食事に招かれたので、新島には家族のような存在であった。

紛らわしいが、同教会には、いまひとつ有力会員もいた。これまで注目されてこなかったが、後述するように新島とは意外な繋がりがある。

大学時代

アーモスト大学では、看板教授のJ・H・シーリー(後に学長)の指導が群を抜く。この点は広く知られている。

彼以外では、近接するマサチューセッツ農科大学のW・S・クラーク学長との師

弟関係が、目につく。

ごく短期とはいえ、アーモスト大学で新島に化学を教えた。

札幌農学校で「札幌バンド」を指導する以前のことで、新島を「私の最初の日本人学生」と断定する。クラークは札幌から帰国の際、わざわざ同志社や「新島旧邸」を訪ね、新島夫妻にも会った。

他大学の教員と比べると、イエール大学のN・ポーター学長である。彼の著作三冊が、今も新島旧蔵書として残る。同じ教派(会衆派)とは言え、大学を越えた奇しき「師弟関係」である。おそらく、イエール好きのテイ



Pearson Hall(写真中央)前での卒業式(Phillips Academy, Andover, MA, 2006年撮影)新島が受洗したホール。当時はBartlet Chapel(アンドーヴァー神学校教会)と呼ばれた。

ラー校長の仲介であろう。

大学院時代

問題は、大学院（アンドーヴァー神学校）である。教授数名の中から恩師をあえて選ぶと、先述のJ・L・テイラーとE・A・パークであろうか。

まず、前者であるが、経歴からしても新島の高校時代から交流が始まっている、おかしくない。イエール（大学と神学校）を出て、アンドーヴァーの会衆派教会（オールド・サウス教会）の牧師を1852年まで務めた。新島が、ヒデユン家と共にこの教会で世話になった頃、テイラーは、フィリップスと神学校双方の会計（つまり、E・テイラーの前任者）兼理事を務めていたので、新島はさぞかし種々の宗教的指導を受けたはずである。

J・L・テイラーは新島が大学に入學すると、神学校の教授（旧約学・牧会神学）、学長に就任するので、新島が院生としてアンドーヴァーに戻るのを心から歓迎したことであろう。帰国する新島が、ボストンで按手礼（牧師任職）を受けた際、アンドーヴァー神学校を代表して参



Park House (左の建物。Phillips Academy、2006年撮影) 旧パーク教授宅。右はDouble Brick House (旧テイラー校長宅)。

列したのが、この学長である。

ただ、両者間の手紙は、残っていない。新島は、ハーディやヒデユンへの手紙の中で、テイラー学長への伝言を時に依頼する程度である。

J・エドワーズの申し子

それに対して、同じ教授、牧師でもパークとの交流は断然、密である。新島に洗礼を授けた可能性が、もつとも高い。

如キ国ニ於テスラ、立派ナル窮理学者（パーク）、孔子ノ如キ説ヲ唱ヘテ、一〔タ〕ヒ罪ヲ犯セシ上ハ、必ス神ヨリ罰ヲ受ケザルヲ不得、又、犯シタル罪ナラハ、其罰ヲ受ベキガ当然ナリト申セシモアリ」と（一）は本井。

新島によれば、パークが説く「孔子ノ如キ説」は、キリスト教と相容れない。「我儕説ク所ノ耶穌ノ妙教ヲ知ラザル者ハ、唯々、孔子ノ云レシ所ノ事ヲノミ取り、一〔タ〕ヒ犯シタル罪ノ贖ベキ由ナキ事ヲ信セリ」。つまり「假令一度、罪ヲ天ニ得ルトモ、祈ル処アリ」とするのが、イエスであるのに対し、「孔子ノ道デハ、祈ル処ナクト云」と論評する。

こうしたパーク批判の背景には、いわゆる「アンドーヴァー神学論争」が潜在する。神を知らずに死去した人間が、死後に救われるかどうか (future probation) をめぐるとの論争は、神学校教授・理事やミッション（アメリカン・ボード）の幹部をも巻き込んだ。その際、新島はパークと立場を異にする。

この論争中、伝統的な「ニューイングランド神学」の最後の旗手、パークの神

学は、リベラルな「新神学」に傾斜した。若手教授たちから、痛烈な批判を受けた。保守派の巨頭、パークは、優れた門弟たちが、次々と自分から離れて行くのを空しく眺めざるをえなかった。とりわけE・C・スマイス（教会史）は、新神学のチャンピオンとして、パークと真正面から対立した。それが表面化するの、パークの後任人事である。

神学校のほとんどの教授や理事たちは、パークの後任にN・スマイスを選出した。三人の客員で構成される委員会（理事會のお目付け役）は、2対1で拒否した。この委員会が理事会と異なる決定を下したのは、開校以来初のことであった。就任を拒否されたN・スマイスは、神学校教授、E・C・スマイスの弟である。

兄は出身大学こそ、ボウドイン（父親の母校）であるが、フィリップスとアンドーヴァー神学校卒なので、新島の先輩にあたる。弟はドイツで批判的神学の感化を受けて帰国し、兄と同様に、パークが代表する保守派神学に異を唱えた。

リベラル派の新神学は、保守派やミッションには、海外伝道の動機や意義を抹

パークは、アンドーヴァー神学校の看板教授（組織神学）で、いわゆる「ニューイングランド神学」を護る「最後の古参番兵」であった。この神学は、ジョナサン・エドワーズに始まり、パークで終わる。「J・エドワーズの申し子」であるパークは、ミドルネームが奇しくもエドワーズであるうえに、パーク夫人は、エドワーズ直系（4代目）である。死期を迎えるまで、パークが手がけていたのは、エドワーズの伝記であった。

エドワーズと言えば、アメリカのキリスト教史上、もつとも著名な牧師、神学者のひとりである。会衆派の信徒・牧師の「世界」ランキング（1904年）で、堂々の一位を獲得したことがある。ちなみに、パークは8位に、そして新島も26位に食い込んでいる。

パークの教授在職は45年間（1836〜81年）にも及び、新島の在学期間（1870〜74年）をもカバーする。

リベラル派からの批判

新島は、パークを畏敬しながらも、時に恩師の神学を批判する。「アメリカノ

殺する危険神学であった。パーク自身もスマイス（弟）の教授任命にもちろん反対した。植村正久は、新島を「パークの弟子」と見なしながらも、「新島は後年、パークを批判し、スマイス・スマイスを掲揚した」と論評する。が、「スマイス・スマイス」なる教授はいない。スマイス兄弟のどちらかであろう。

新島襄の受洗

ところで、新島は、高校生の時にすでにパークの指導を受けていたと思われる。新島が、神学校教会で受洗したのは、1866年12月30日、高校入学後、一年少し経った頃である。洗礼記録が現存しないため、いまもって授洗した牧師は特定できない。

内村鑑三ひとり、シーリーこそ「実ニ新島氏ニ洗礼ヲ授ケシ仁ナレバ」と断定する。が、その根拠は不確実である。

神学校教会は、「学園教会」であった。特定の専任牧師を置かず、高校と同じキャンパスにあった神学校の教授が、持ち廻りで説教や授洗するのが、慣行であった。だから、アモスト大学教授のシ

リーが、特別の礼拝でもない年末に、アーモストからわざわざ神学校にまで向いて、授洗をするのは、かなり不自然なことである。

シーリーは学長に就任するや、アーモスト大学学園教会の牧師（1877年（92年）をも兼任する。また、アンドーヴァー神学校でも、1873年から1年間だけ講義を受け持つ。いずれも新島が高校卒業後のことなので、シーリーが新島に授洗した可能性は低い。

逆に、シーリーがアーモスト大学の学園教会牧師を務めた時期は、内村のアーモスト在学中なので、内村に間違った臆断が生まれたのであろう。

当時、フィリップスの生徒たちは、毎日曜日には聖書研究（神学生が担当）と神学校教会礼拝の双方に出席する義務があった。新島も、平日には「学校で」英数を、「毎週、日曜日には聖書を」学ぶ、と手紙に記すので、聖書研究もキャンパス（学校か神学校教会）でなされたと思われる。

それだけに、同一日曜日に新島が地域のオールド・サウス教会に通うことには、

つ。パークには、「親友」が二人いたが、その一人が校長であった。新島も列席した校長の葬儀では、聖書朗読をJ・L・テイラーが、式辞をパークが受け持った。校長の墓の銘文も、パークが選んだ。まもなく編まれた校長の追悼集（新島旧邸文庫）には、パーク、J・L・テイラー、ほかひとり、追悼文を寄せた。こうした好（よ）からも、隣り同士の校長とパークは、新島を早くから自宅に招いてくれていたはずである。

新島とパークの交流が、早くから始まっていたことを示すエピソードがある。高校の夏休み（1867年7月）、新島はA・ハーディやH・S・テイラー船長（ワイルド・ローヴァー号）の出身地に行こうとしたが、汽車の乗り換えに失敗し、別の所に着いてしまった。困り果てた新島は、最寄の教会を訪ね、牧師に宿の斡旋を依頼した。

当初、新島は牧師から胡散臭い眼で見られ、スペインの貧乏漁師と間違われた。牧師は新島を安宿へ案内しようとした。しかし、新島がアンドーヴァーから来たことを告げると、牧師は同地のオールド・

無理が伴う。神学校教会で洗礼を受けただけに、新島は高校生でありながら、神学生や神学校の教授（牧師）の説教を聞いたり、宗教的な指導を受けたりする機会に、恵まれたはずである。中でも、パークの感化は、群を抜いていたであろう。

「聖学校の教師」

パークは神学者としての力量以上に、説教者としての才能に恵まれていた。講壇から聖書の言葉を語る姿は、実に威厳と権威に満ちていたので、会衆が息を潜めて謹聴する有様は、「ハエが飛ぶ羽の音が、まるで大砲のように響き渡るほど」であったという。

おそらく、新島も何度かそうした迫真の場を体験したであろう。留学生生活を始めてからかなり早い段階で、パークその人とも知り合ったはずである。いや、パークが先に新島に目をかけた

サウス教会の役員とパークの名前を告げた。「共によく存じている」と新島が答えると、にわかには牧師は態度を改め、新島の来歴と素性を詳しく聞こうとした。新島への信頼度を急上昇させた牧師は、その地で最高級のホテルに新島を連れて行き、料金も支払ってくれた。明らかに「パーク効果」である。パークが、それよりほんの2、3週間前に、按手札（牧師任職式）のためにこの地を訪ねていたことも、新島には幸いした。

E・A・パークのサイン

実はそれ以上に信じ難いことが、起きている。新島が当時、所持していたサイン帳には、パークのサインがある。目付は彼が想定外の街に迷い込んだ、まさにその日である。すなわち、アンドーヴァーを発つその日に新島はパークを訪ねて、サインを所望したのであるうか。であれば、先の牧師に対する、「今朝もお会いしましたよ」との最新情報が、新島の信用を高めるのに有力な材料となったはずである。ちなみに、パークのサインには、次の一文が添えられている。



E. A. Parkの墓(2006年撮影) 学園内の霊園(Phillips Academy Cemetery)にテイラー校長の墓と並んで立つ。

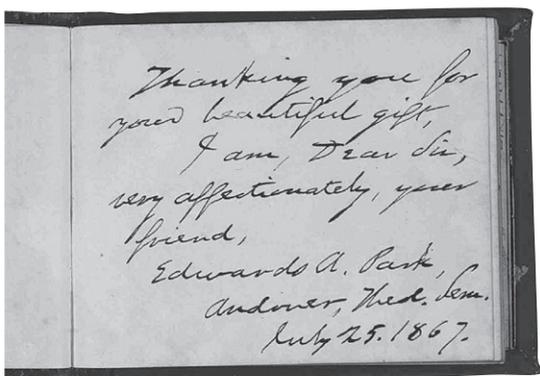
かもしれない。留守家族への手紙で、新島はこう認める。

「人々（こ）を愛敬し、大学校（フィリップス）の頭取（テイラー校長）、聖学校（神学校）の教師に至る迄も、小子を深切（親切）に取扱、路上に出逢候ハ、手を握り（此国の礼なり）、今日は如何御座ある哉、と丁寧（この）に挨拶いたし具候」。

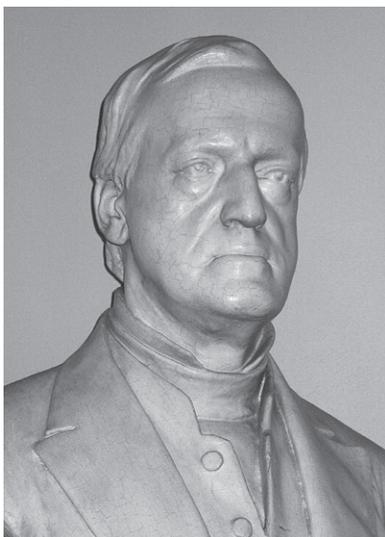
「聖学校の教師」とは、パークであろう。彼はテイラー校長と共にキャンパスに住む。しかも、隣り同士である（実は、パークの希望で、墓もそうである。両人の墓は、校内のキャンパス墓地に並んで立

Thanking you for your beautiful gift.
I am, Dear Sir, very affectionately, your friend.

新島は、大学院教授（牧師）とすでに懇意な「友人」関係を築いている。神学校教授のサインは、パークだけである。これは、パークが新島に洗礼を授けた有力な典拠のひとつとなりえる。



E. A. Parkの署名(新島旧蔵サイン帳。新島遺品庫蔵)。



E. A. Parkの胸像(2006年撮影)
旧American Board本部ビルの図書室に
A. Hardyと共に顕彰されている。

パークの授業

パークとの関係は、新島のアーモスト時代には、やや疎遠となる。新島が大学院入学のためにアンドーヴァーに戻るや、親交が復活する。神学校に入学した半年後(1871年2月)、大学時代の室友への返信に新島は、こう記す。

「勉学を続けるためにアンドーヴァーに戻られる、と聞いて大変うれいですが、以前に一度、神学を勉強したにもかかわらず、パーク先生の講義を受講されるとのことですが、けっして後悔はされない

はずです」。

パークの授業は、評判だったらしい。新島がパークの授業をとつたのは、同年秋季期のことで、その様子をハーディ夫人に書き送っている。「私はパーク教授の講義に出席し、その講義に沿った書物を読んでいます。今年

は神学校でいちばん厳

しい年であるかもしれません」。

パークの授業は、ウイットに富んでいた。ソクラテス的手法を駆使して、質問を次々と学生に投げかけた。それだけに、新島には相当の予習が要求される厳しい科目であった。

同志社には、新島自筆の「神学受講ノート」が複数冊、残されている。パークの受講ノートも何冊が含まれる。新島がパークから学んだことのひとつが、「自由」と「良心」で、いずれも、新島のキーワードとなった。自由とは、「良心に束縛された自由」であり、隣人に仕える

ことを要求する、という捉え方を学んだ。

パーク譲りの神学

帰国直後、新島は横浜で、日英両語での礼拝説教を複数回、依頼された。日本語の説教は、評判がよくなかった。言葉の障壁以外にも、神学の古さが要因であった。植村はこう指摘する。

「此れ〔不評の要因〕は、アンドヴァールの神学校で、エドワード・パイク教授の神学に育てられた結果、其ままとしては、余り不思議では無かつたらう。當時、新島の神学は、余程、保守的であつたに相違ない」。

パークへの敬慕から、新島は神学校の最終学年(3年目)では、パークの授業を履修することを最優先させた。が、貫徹できなかった。岩倉使節団との雇用契約が完了した際は、ドイツからそのまま日本へ帰国するという選択肢もあった。

しかし、新島は神学校に復学した。パークの授業を修めるためである。「私は神学校の二年次(1872年)のときに、ヨーロッパに行ったために十五か月休んでしまい、パーク教授の科目を修得する

機会を失いました」。

一方のパークもまたハーディと共に、神学校への復学を早くから新島に進言している。新島が田中不二磨に同行して、ニューヨークから渡英する一か月前(1872年4月)、パークは新島宛てに、スコットランドの関係者への紹介状を送付し、「無事に神学校に復学すること」とわざわざ書き添えている。

パークに再会

2度目の渡米時(1884年)、10月31日に新島はアンドーヴァーにヒュエン家を訪ね、旧交を温めた。同日、さつそくパーク(元教授)やシーリーなど、2、3の旧師にも挨拶をしている。「別シテパーク先生之御宅」である。2日には、パーク家で昼食を、そしてE・C・スマイス教授宅で夕食を振舞われた。3日、今度はJ・L・テイラー教授、ならびにE・テイラーを訪問している。

翌年9月21日にも新島は、神学校校長のF・P・バンクロフトからアンドーヴァーに招かれた。翌日、スマイス教授から請われて、礼拝で話をした。24日には、

パークに会い、馬車に同乗させてもらっている。

28日、今度はスマイス教授の馬車に乗。30日には、パークからお茶に招かれ、その後、数マイル、ともにドライブしている。10月に入ってから、1日にスマイス教授から呼ばれた。夕方のお茶会には、G・ハリス教授(パークの後任者)も加わった。以上からも、パークと新島との親密さが、目立つ。パークから洗礼を受けたことが、底流にあつたからであらうか。

今もボストンの旧アメリカン・ボード本部ビルには、ミッションの功労者二人の胸像が飾られている。ハーディとパークである。前者は、新島の最大の恩人で、「アメリカの父」。一方のパークも新島には「魂の父」で、シーリーと並ぶ偉大な

恩師であった。新島は善きメンターに恵まれたものである。

(写真はサイン帳を除き、筆者が撮影)



E. A. Park(右)とA. Hardy(左)の胸像(2008年撮影)
Congregational House(Beacon St., Boston)2階のCongregational Libraryに設置。
ミッションだけでなく、新島にとっても、2人は大恩人である。